［論文］

パーリ文献中の saddhādhimutta について
――第一人者の伝承に基づく訳語の検討――

古　川　洋　平

On the Meaning of *saddhādhimutta* in the Pali Literature:
Based on the stories of the first among disciples

Furukawa, Yohei

In this paper, I examine the translation of *saddhādhimutta* through considering the definitions of *saddhā* and *adhimutti*, *saddhā* in religious practice, and the stories of Vakkali and *Sigālaka*'s mother, both of them are considered among the first *saddhādhimutta* in Theravāda Buddhism.

In the Pali Canon, *saddhā* is located at the starting point of religious practice toward the Buddha, and practitioners are required to have faith(*saddhā*) in the teachings of the Buddha, and to enhance *saddhā* by understanding it. In the stories of Vakkali and *Sigālaka*'s mother, their *saddhā* is described as too powerful to carry out the religious practices that follow *saddhā*. And in the story of Sigālaka's mother, *abhiniviṭṭha* (settled in) is used as a paraphrase of *adhimutti*. It is a good representation of the character of *adhimutti* that makes its possesser focus only the target while giving no attention to other things.

My analysis leads us to the conclusion that, as Murakami and Oikawa suggest, *saddhādhimutta* is "someone who has set one's mind to faith" or "someone who has inclined to faith".

本論において，筆者は上座部仏教の中における Ś と A の定義，修道論中の Ś, saddhādhimutta 第一とされるヴァッカリとシガーラカの母の伝承の 3 点を通して saddhādhimutta の訳語の考察を行う。

パーリ聖典において，仏に対するŚは修道の起点に位置しており，仏の教えを信じ（Śを抱き），Śを教えの理解によって強化することが求められる。ヴァッカリとシガーラカの母の伝承の中で，彼等のŚはŚに続く修行を実践するには強力過ぎたとされている。また，後者の伝承では，adhiniviṭṭha（入れ込んだ）がAの言い換えとして使用される。これは他のものに目を向けないというAの特徴をよく表している。

以上の検討から筆者は，村上・及川氏が提示するように，saddhādhimutta を「Śに志向している者」「Śに傾倒している者」と理解する。

キーワード：saddhā，saddhādhimutta，信，信解，ヴァッカリ

1．はじめに(1)

初期仏教における信の考察を行うにあたっては，特にパーリ聖典に用いられるいくつかの「信」を意味する用語の理解が必須となる。仏教的信の中核を担う語はサンスクリット語 śrad-√dhā 由来の語（以下「Ś」と表記）であるが(2)，その他にŚの類義語とされる，同じく pra-√sad, adhi-√muc(3)由来の語（以下それぞれ「P」，「A」と表記）も使用される。Śが仏教に限らず古典インド一般に「信」の意味に解されていることを考えれば，これらŚの類義語がŚとどのような関連性を有しているのかに注目することが，仏教的信のさらなる解明に資するものとなると考える。

本論のテーマである saddhādhimutta は，上に言及したŚとAによって形成される複合語であり，従来，様々な訳が提示されてきた。そのような中で，紙数を割いて本語に検討を加え，方向性を示しているのが村上・及川両氏による『仏のことば 註』（Sn 註訳）である。

Sn 第 5 章 Pārāyanavagga の中で，釈尊はピンギヤに対して「信を発せよ」（Sn 1146c: pamuñcassu saddhaṃ）と述べ, その先達としてヴァッカリ（Vakkali）の名前を挙げている。ヴァッカリは比丘達の中で saddhādhimutta 第一とされる人物である（A I, p. 24）。両氏は Sn 1146を本語の類例を含めて考察する中で，本語に対し「信に志向した」「信に傾倒した」という訳語を提示する

([村上・及川 1989: 175–189n.16])[4]。筆者は本語に対する村上・及川両氏の訳語を妥当と考えるが，その後出版された諸訳を参照すると，両氏の提示は必ずしも定着しているとは言えない[5]。そこで本論では，次に示すヴァッカリが saddhādhimutta 第一である註釈の理由説明を手掛かりとして本語の意味を考察し，村上・及川両氏の理解の補強を試みたい。

〈用例①〉ヴァッカリが saddhādhimutta 中の第一人者である理由

saddhādhimuttānan ti saddhāya adhimuttānaṃ balavasaddhānaṃ bhikkhūnaṃ Vakkalitthero aggo ti dasseti. aññesaṃ hi saddhā vaḍḍhetabbā hoti, therassa pana hāpetabbā jātā. tasmā so saddhādhimuttānaṃ aggo ti vutto. (Mp I, p. 248 (ad. A I, p. 24))

saddhādhimuttānam とは① saddhā へ adhi-√muc（志向・傾倒）している，強力な saddhā をもつ比丘達の中で第一がヴァッカリ長老である，と示している。②というのも，〔ヴァッカリ〕以外の者達にとって saddhā は増大されるべきものとなるのに，〔ヴァッカリ〕長老の〔saddhā は〕捨てさせられるべきものとなっているので。それ故に彼は saddhādhimutta 達のうちの第一人者と言われる[6]。

〈用例②〉Ap の Vakkalitthera-Apadāna に対する註釈説明

saddhādhimutto ti saddahanasaddhāya sāsane adhimutto patiṭṭhito ti attho. (Ap-a p. 494)

saddhādhimutto とは，śrad-√dhā することという saddhā を通じて教えの上に adhi-√muc している（固定している），確立している，という意味。

1. saddhādhimutta は saddhāya adhimutta と分解され，用例①は本語を「強力な Ś をもつ」と解す。
2. adhi-√muc の動詞形がかかる語は acc. あるいは loc. を取り，ins. を取らない（Cf. CPD s.v. adhimuccati.）。従って本語は「Ś に向かって / の上に A した」

という理解が出発点となる。

3. ただし，用例②のようにŚとAを直接結びつけない理解も確認される[7]。

以下，上掲下線部①に関して，パーリ聖典を伝承した上座部大寺派におけるŚとAの定義的用例に見る両語の関連性を概観する。次いで，下線部②に関して，修道論中のŚの位置付け及びsaddhādhimutta第一とされるヴァッカリとシガーラカの母の伝承に注目することで，本語におけるAの性格について一言していく。

2．ŚとAの定義的用例に見る両語の関係

Vismを中心とする註釈文献には，「特性」（lakkhaṇa）等の語を用いて仏教用語が定義される記述が散見される。

その中でŚは，確定（okappanā）を特性とし，Pさせること（pasādana）を本質的な働き（rasa）とし，Aを附帯する様相（paccupaṭṭhāna）とすると説明される[8]。Vism註によると，Śの附帯する様相としてのAは聖典に省略された（yevāpanaka）心所[9]としてのAではない[10]。上掲例と同様の定義例は註釈文献に散見され，AはŚの特性（lakkhaṇa）とも理解される（Sv I, p. 63 etc. Cf.［林2014: 57］.）。

この聖典に省略されたAは，同じくVismにおいて定義されている。それによると，本語は決定（sanniṭṭhāna）を特性とし，躊躇い無きこと（asaṃsappa）を本質的な働きとし，決断（nicchaya）を付帯する様相とするものと考えられている[11]。ここに定義されているAは，「決意」と解されるものである[12]。

さらにVismには，聖典に省略された心所ではないと解されるAも取り上げられている。それによると，AとはŚのことであり，過度にPした状態となっている「強力なŚ」と考えられている[13][14]。

以上の3点を総合すると，AはŚの類義語であると共にŚの特徴を示す語であり，強力なŚとしての側面をもつ語であると言える[15]。先のヴァッ

カリが第一人者である理由説明の中で saddhādhimutta が「強力な Ś」と説明されていたことは，このような A の一面を示したものと言えるであろう。

3．修道論における Ś

初期仏教における信（Ś）は，主に修道論の中に位置付けられる形で論じられてきた[16]。三宝に帰依した仏弟子は仏に対する Ś を起点として，仏が説き示す段階的な道筋を辿っていくことになる（D 2 etc.）。

中でも『中部』「ヴィーマンサカ経」（M 47）は，如来が正等覚者に相応しいかを探求することをテーマとしている。本経の中で比丘は，如来に質問をし，如来の説く教えをよく知った上で（abhi-√jñā），「世尊は正しく完全に覚った者である」等と師について pra-√sad する。そして，それを受ける形で，「如来に対して Ś が入り込み，根が生じ，確立したものとなる時，比丘等よ，これが根拠のある，見ることを根本とする堅固な Ś と言われる」[17]と説かれている。「如来に対して Ś が入り込む」という表現は，信解脱者（saddhāvimutta）に対する説明と同じであり[18]，註釈はこの者を四向四果で言う預流果以上阿羅漢向以下の者と解している（Ps III, pp. 189f.）。このように，如来に対する Ś は，修行者の宗教的境涯の高まりと共に，如来の説く教えの理解を通じて強化され，確立されていくものである。

また，上述の Ś の確立は，仏の説く教法を信じ，さらにそれを知見することに基づいている。

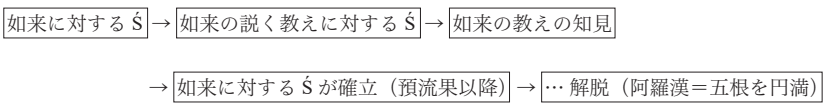
〈用例①〉

cakkhuṃ bhikkhave aniccaṃ vipariṇāmim aññathābhāvi, sotaṃ aniccaṃ … mano anicco vipariṇāmī aññathābhāvī. yo bhikkhave ime dhamme evaṃ saddahati adhimuccati, ayaṃ vuccati saddhānusārī, … yassa kho bhikkhave ime dhammā evaṃ paññāya mattaso nijjhānaṃ khamanti, ayaṃ vuccati dhammānusārī, … yo bhikkhave ime dhamme evaṃ jānāti passati, ayaṃ vuccati sotāpanno, … (S III, p. 225)

（釈尊）「比丘等よ，眼は非恒常的であり，変異するもの，別様になるものである。耳は非恒常的なものであり……（以下，六根）……思考は非恒常的であり，変異するもの，別様になるものである。比丘等よ，①これら〔眼等の〕諸のもの（dhamma）を以上〕のように śrad-√dhā し，adhi-√muc する者（決意する者）[19]，彼は随信行者であると言われる。……比丘等よ，知っての通り，この者のこれら〔眼等の〕諸のものが以上〔下線部〕のように〔無常等であると〕洞察力（慧）を用いて一定程度考察に耐えるところの彼は随法行者であると言われる。……比丘等よ，②これら〔眼等の〕諸のものを以上のように〔無常等であると〕知り，見る者，彼は預流者であると言われる。……」

上掲例の下線部①で随信行者が教法（諸法の無常等）を śrad-√dhā し，adhi-√muc しているのに対し，下線部②の預流者はこれを自ら知見している。預流果以上の境涯に属する信解脱者は如来に対して Ś が入り込み確立した者であるから，教法の知見を通じて，如来に対する Ś が確立・強化されていることが分かる。信解脱者は，パーリ聖典の段階から信根が突出している（adhimatta）[20]者と理解されている（A I, p. 118）[21]。

その他，修行徳目中の Ś について言えば，五根は宗教的境涯が高まるにつれ，満たされていくものと考えられている。S48. 11–17に登場する随信行者（＝預流向）から阿羅漢の各境涯の者はいずれも五根を具えており，最上位の阿羅漢は五根を完全に満たしている存在とされる（S V, pp. 200–202）。出家した仏弟子は各々に特徴を持ちつつも，最終的には五根をすべて完備した阿羅漢となることを目指す。以上の流れをまとめると，次のようになるであろう。



このように，仏弟子の如来に対する Ś（信根）は，教法の理解と共に確立・強化されていくのが理想的な流れである。本論冒頭に取り上げた Ap-a 中の saddhādhimutta の説明（1–用例②）は，以上の修道論上の Ś から教法の理解へと繋がる流れを踏まえた理解であると考えられる。

もっとも，上に取り上げたものは，あくまで理想的な流れであり，あらゆる仏弟子の Ś が，常に適切に働くとは限らない。パーリ聖典には次のような用例が確認される。

〈用例②〉

dve ’me bhikkhave Tathāgataṃ abbhācikkhanti. katame dve? duṭṭho vā dosantaro saddho vā duggahītena. ime kho bhikkhave dve Tathāgataṃ abbhācikkhanti. (A I, p. 59)

比丘等よ，これら二者が如来を非難する。二者とはどれか？　嫌悪し，嫌悪を抱く者〔が非難し〕，あるいは saddha（Ś を具えた者）が誤解によって〔非難する〕。比丘等よ，知っての通り，これら二者が如来を非難する。

〈用例③〉用例②下線部の註釈説明

saddho vā duggahītenā ti yo hi vā ñāṇavirahitāya saddhāya atisaddho hoti muddhappasanno, so pi “Buddho nāma sabbalokuttaro, sabbe tassa kesādayo dvāttiṃsa koṭṭhāsā lokuttarā yevā” ti ādinā nayena duggahītaṃ gaṇhitvā Tathāgataṃ abbhācikkhati. (Mp II, p. 118)

saddho vā duggahītena とは，というのも，あるいは智（ñāṇa）を欠いた saddhā により śrad-√dhā し過ぎており（atisaddha），頭から pra-√sad している者（muddhappasanna），彼もまた「ブッダというのは一切の点で世間を超えており，彼の髪等の三十二の諸の部位（三十二相）は世間を超えているに他ならない」等の仕方により誤解を得て，如来を非難するので。

上掲用例③下線部の「頭から pra-√sad している者」（muddhappasanna）とは，正しい理解を伴わずに相手を信じ込んでしまっている者のことをさす（⇔ aveccappasanna）[22]。パーリ聖典において如来を非難することは，非難した者の不幸につながる行為である（M I, p. 259）。上掲用例②の中で saddha は，強力な Ś を具えているにも拘らず，智を欠いているために Ś の対象である如来を非難してしまっている。

修道論の視点から見れば，如来に対する Ś は仏の説く教えの理解を通じて確立されていく流れが確認出来る。その一方で，たとえ如来に対する Ś を具えていても，正しい理解を伴わなければ，あるいは伴っていかなければ，適切な結果に結びついていくことは難しい。そして，次節に検討する saddhādhimutta 第一とされるヴァッカリ達もまた，上掲の人物のように，Ś が適切に機能しない人物であった。

4．ヴァッカリとシガーラカの母の Ś

以下，比丘・比丘尼中の saddhādhimutta 第一とされるヴァッカリとシガーラカの母の信（Ś）について，特に註釈文献に注目して若干検討を加える[23]。

4．(1) ヴァッカリの Ś

註釈文献において，ヴァッカリが阿羅漢となるまでの伝承を伝える資料はいくつかあるが（Dhp-a, Mp, Vism-mhṭ, Th-a, Ap-a），saddhādhimutta という記述を除き，Ś が使用されるのはヴァッカリの出家前と（Mp I, p. 249），出家後に釈尊の指導を受けながら観察行（vipassanā）を行おうとした際の記述である。以下，後者の記述を引用する。

〈用例①〉

kin te Vakkalī ti ādinā satthārā ovadito Gijjhakūṭe viharanto vipassanaṃ paṭṭhapesi. tassa saddhābalavabhāvato eva vipassana-vīthiṃ na otarati, … (Th-a II, p. 148)

「ヴァッカリよ，君が〔この腐った身体を見て〕何になるのか」等〔の言葉〕により師に教戒された〔ヴァッカリは〕，霊鷲山で時を過ごしながら，観察行を起こした〔が〕，彼の saddhā が強力であっただけのために，観察に関する路（顕現的な心作用の経路）に降りずにいた[24]。……

ヴァッカリは釈尊から教戒された後に定を修めようとしたが，自身の強力な Ś が原因で修めることが出来なかった。引用冒頭の釈尊の言葉は聖典の「ヴァッカリ経」（S 22.87）を背景としている。Th-a によれば，ヴァッカリは釈尊の色身（rūpakāya）を見飽きることなく（atitto），「家に居ては師を見ることができない」と考え出家している。出家後，彼は四六時中釈尊を見て過ごしていたが，その際釈尊は彼に「ヴァッカリよ，君がこの腐った身体を見て何になるというのか？　ヴァッカリよ，法を見る者，彼は私を見る」等と説いている。上掲引用の後，ヴァッカリは最終的に観察行を成就し阿羅漢となった（Th-a II, pp. 147–149）。また，同じく Th-a では，ヴァッカリは五根のうちの信根（Ś）に特化した者と考えられている[25]。

それでは，上述のヴァッカリの Ś が強力であるために定が修められなかった理由はどのあたりにあるのか。Vism は五根のバランスに関して次のように論じている。

〈用例②〉

indriyasamattapaṭipādanaṃ nāmā saddhādīnaṃ indriyānaṃ samabhāvakaraṇaṃ. sace hi ’ssa saddhindriyaṃ balavaṃ hoti, itarāni mandāni, tato vīriyindriyaṃ paggahakiccaṃ, satindriyaṃ upaṭṭhānakiccaṃ, samādhindriyaṃ avikkhepakiccaṃ, paññindriyaṃ dassanakiccaṃ kātuṃ na sakkoti. tasmā taṃ dhammasabhāvapaccavekkhaṇena vā yathā vā manasikaroto balavaṃ jātaṃ, tathā amanasikārena hāpetabbaṃ. Vakkalittheravatthu c‘ ettha nidassanaṃ. (Vism p. 129)

indriyasamattapaṭipādanaṃ（諸根（機能）に平衡性をもたらすこと）というのは，saddhā 等々の諸機能（根）の平衡な状態を作ること。というのも，もしその者の saddhā という機能（信根）が強力となり，それ以外の〔諸機能〕が鈍くなれば，その後，勇敢さという機能（精進根）は策励という為されるべきことを，留意という機能（念根）は持続という為されるべきことを，精神統一という機能（定根）は不散乱という為されるべきことを，洞察という機能（慧根）は見ることという為されるべきことを，為すことが出来ない。それ故に，それ（強力な saddhā という機能）はものの本質を観察することにより，あるいはある状態で注意する者には〔saddhā という機能〕が強力になるが，そのような状態では注意しないことにより，捨てさせられるべきである。またこの点についてはヴァッカリ長老の物語が事例である。

上掲の例では，五根中の信根が強力であると他の四根が適切に働けなくなるために捨てさせられるべきであることがヴァッカリの事例と共に述べられている。上掲例の後，Vism は特に信根と慧根のバランスを強調し，定は Ś が強力であっても働き，観察行を行っている者には強力な慧が相応しいと論じる（Vism pp. 129–130）。以上の点を踏まえると，先の Th-a の用例①でヴァッカリが観察行を修められなかった理由が，彼の信根がその他の根，特に慧根と比較して強力過ぎる余り，通常 Ś が強力であっても働く定が働かず，観察行の支障になってしまったためであったことが分かる。

４．⑵　シガーラカの母の Ś の特性としての A

ヴァッカリと同じく比丘尼中の saddhādhimutta 第一とされるシガーラカの母については，次のような伝承が伝わっている。

〈用例③〉

saddhādhimuttānan ti saddhālakkhaṇe abhiniviṭṭhānaṃ Sigālakamātā aggā ti

dasseti. … sā ekadivasaṃ satthu dhammakathaṃ sutvā paṭiladdhasaddhā satthu santike gantvā pabbaji. pabbajitakālato paṭṭhāya saddhindriyaṃ adhimattaṃ paṭilabhi. sā dhammassavanatthāya vihāraṃ gantvā dasabalassa sarīra-nipphattiṃ olokayamānā va tiṭṭhati. satthā tassā saddhālakkhaṇe abhiniviṭṭha-bhāvaṃ ñatvā sappāyaṃ katvā pasādanīyam eva dhammaṃ deseti. sā pi therī saddhālakkhaṇam eva dhuraṃ katvā arahattaṃ pāpuṇi. … (Mp I, p. 381)

① saddhādhimuttānam とは saddhā の特性に没入している者達の第一人者がシガーラカの母である，と示している。……彼女はある日，師の説法を聞いて saddhā を獲得した者として師の近くに行って出家した。②出家してから以後，saddhā という機能（信根）を突出して（adhimattam）獲得した。③彼女は聞法のために〔世尊の〕住居に行っても十力者（世尊）の成就されたものとしての身体を眺めて立っているだけであった。④師は他ならぬ彼女の saddhā の特性に没入している状態（abhiniviṭṭha-bhāva）を知って，教法を相応しく pra-√sad させるに他ならないものにして示していた。その長老尼もまた，他ならぬ saddhā の特性をてことして，阿羅漢果に達した。……

上掲例において，シガーラカの母は出家後に突出した Ś を獲得し（下線部②），そのために聞法できずに釈尊の身体を眺めているだけであった（下線部③）。釈尊はそんな彼女の状態を知って指導を行い，最終的にシガーラカの母は阿羅漢となった。下線部①④中の「没入」（abhiniviṭṭha）は Nidd 以来 A と併用される語であり[26]，下線部①では A の言い換えとして使用されていることは明らかである。

以上の両仏弟子の伝承に認められる「没入」の性格は，パーリ聖典にも見出すことが出来る。『中部』「スナッカッタ経」（M 105）で釈尊は，世俗的な利益・不動・無所有処・非想非非想処・涅槃の 5 つのうち，世俗的な利益に関して次のように述べている。

〈用例④〉

… Sunakkhatta ṭhānaṃ etaṃ vijjati yaṃ idh' ekacco purisapuggalo lokāmisādhimutto assa. lokāmisādhimuttassa kho Sunakkhatta purisapuggalassa tappatirūpī c' eva kathā saṇṭhāti, tadanudhammañ ca anuvitakketi anuvicāreti, tañ ca purisaṃ bhajati, tena ca vittiṃ āpajjati; āṇeñjapaṭisaṃyuttāya[27] ca pana kathāya kacchamānāya na sussūsati, na sotaṃ odahati, na aññācittaṃ upaṭṭhapeti, na ca etaṃ purisaṃ bhajati, na ca tena vittiṃ āpajjati. so evam assa veditabbo: lokāmisādhimutto purisapuggalo ti. (M II, p. 254)

（釈尊）「……スナッカッタよ，この道理が見つけられる。〔すなわち,〕今ここに，或る人間は世俗の利益へ adhi-√muc（志向）している者となるとする[28]。スナッカッタよ，知っての通り，世俗の利益へと adhi-√muc している人にはそれに相応しい話があり，それに応じたものを思慮し，熟慮し，その〔同様の〕人に親しみ，それにより喜びに踏み込む。しかし不動に相応しい話が語られている時には〔それを話している者の言葉を〕聞こうとしない。耳を傾けない。理解しようとする心を起こさず，その〔不動に相応しい話を語る〕人に親しまず，それにより喜びに踏み込まない。彼は次のように知られるべきである。〔すなわち,〕世俗の利益へ adhi-√muc している人である」と。

引用の後，釈尊は残りの 4 つについて，涅槃を含むいずれの事例でも隣り合う項目について下線部と同様に説いている。上掲例の下線部分には，A のもつ対象の他に目が向かなくなる性格を指摘することが出来よう。

saddhādhimutta 第一とされる 2 人の伝承を整理すると，仏に対する Ś が強力な余り，仏道修行の障害となってしまった点が共通している。先に引用した聖典の用例は，仏以外に目を向かなくなるという二人の Ś の付帯する様相・特性としての A の性格をよく示している。

5．まとめと結論

本論では，saddhādhimutta の訳語をめぐって，上座部大寺派における Ś と A の定語的用例に見る両語の関係性，修道論における Ś の位置付け，saddhādhimutta 第一とされるヴァッカリとシガーラカの母の Ś に関する記述の 3 点に注目した考察を行った。

パーリ聖典において，如来（釈尊）に対する Ś は修道上の起点に位置するが，ただ如来を信じてさえいればよいというような類のものではなく，如来の教え（釈尊の言葉を借りれば，釈尊自身）を信じ，自らそれを理解すること（知見）を通して強化し，確固たるものとしていくことが求められる。saddhādhimutta 中第一とされるヴァッカリやシガーラカの母の伝承は，彼らの釈尊に対する Ś が強力過ぎる余り，二人が Ś に続く修行項目（定・聞法）を適切に遂行出来ず，仏道修行の弊害となったことを伝えている。伝承に使用される「没入」（abhiniviṭṭha）は，対象以外のものに目を向けなくなる A の性格をよく表している。

以上の考察からヴァッカリに対して使用される saddhādhimutta の訳語を考えると，［村上・及川 1989］が指摘するように，「信に志向している者」，さらに Ś が強力で他方面に心を向けることのない者というニュアンスで，「信に傾倒している者」ほどが穏当であると考える。

注

⑴ 本論中のパーリ語テキストは Pali Text Society 版を底本とし，時にビルマ第六結集版（Vipassana Research Institute (VRI) の Chaṭṭha Saṅgāyana CD の電子データ）を使用している。 パーリ文献の略号は Margaret Cone, *A Dictionary of Pāli* の略号一覧に従う。異読は必要な場合にのみ提示する。

⑵ 本語の語義と語形に関しては Cf.［後藤 2007］.

⑶ ［櫻部 1997: 38］は初期経典における A について，本語の意味を「〔何かに〕意を向ける傾向（あるいはさらに積極的に何かを愛楽すること）」と「疑惑せぬこと，確信」という 2 つに大別する。

⑷ Sn 1146については後日［村上 1993: 139–142］が梵天勧請説話に使用されるŚとの関連の中で検討を加えている。また，村上氏が主張する本Śが否定的なものとして扱われない点については［拙稿 2018］でも論じた。

⑸ 諸訳におけるsaddhādhimutta訳：［Woodword 1932: 18］，*Dictionay of Pali Proper Names* s.v. Vakkali「… who are of implicit faith is Vakkali.」；『南伝大蔵経』第17巻「信勝解中の〔第一〕はこれ婆迦利なり」（p. 34）；［村上・及川 1989: 176］「信に志向した」「信に傾倒した」；［Anālayo 2011: 164n.45］「… among those who are devoted by faith.」；［Bodhi 2012: 110］「… among those resolved through faith is Vakkali.」；［村上・及川 2014: 309］「信に傾倒（信解）した者たちの第一位」；［浪花 2016: 41］「信と信解を持つ者のうちでは，ヴァッカリである」.

⑹ Sn 1146のヴァッカリに対するNidd IIの理解：yathā Vakkalitthero saddho saddhāgaruko saddhāpubbaṅgamo saddhādhimutto saddhādhipateyyo arahattappatto, … (Nidd II(Be) p. 223)「saddha, saddhāを重んじる者，saddhāを先導とする者，saddhāへadhi-√mucしている者，saddhāを至上とする者として阿羅漢果に達したヴァッカリ長老のように……」

⑺ その他，Paṭisにも次の用例が確認される。本saddhādhimuttaはヴァッカリの事例と直接関わらないので，ここでは言及にとどめる。

rūpe ādīnavaṃ disvā rūpavirāge chandajāto hoti saddhādhimutto … (Paṭis I, p. 192 foll.)

物に関して災いを見て，物を厭離すること（涅槃）に対して意欲が生じた者がsaddhādhimutta（〔涅槃を実現できるという〕saddhāに志向した者）となる……

⑻ sā saddahanalakkhaṇā, okappanalakkhaṇā vā; pasādanarasā … pakkhandanarasā vā … akālussiyapaccupaṭṭhānā, adhimuttipaccupaṭṭhānā vā … (Vism p. 464)

⑼ 聖典，つまり三蔵に省略された（yevāpanaka）心所についてはCf. 水野［1964: 260］.

⑽ pasādanīyaṭṭhānesu pasādaviparītaṃ akusalaṃ assaddhiyaṃ, micchādhimutti ca, tappaccanīko va pasādabhūto vatthugato nicchayo *adhimutti*, na yevāpanakādhimokkho.（Vism-mhṭ(Be) II, p. 142）「諸のpra-√sadさせられるべき場所において，pasādaとは逆の，善からぬśrad-√dhāしないことと悪しきadhimuttiとがあり，他ならぬそれと反対の，pasādaである基盤に至った決断が，adhimuttiである。聖典に省略されたadhimokkha（決意）ではない」

⑾ adhimuccanaṃ adhimokkho. so sanniṭṭhānalakkhaṇo, asaṃsappanaraso, nicchayapaccupaṭṭhāno, … (Vism p. 466)

⑿ VismはAを，Śと類義性を有しつつも，Pとは関わらない語と考えているようである（Vism-mhṭ(Be) II, p. 146）。

(13) adhimokkho ti saddhā, vipassanāsampayuttā yeva hi ’ssa cittacetasikānaṃ atisaya-pasādabhūtā balavatī saddhā uppajjati. (Vism p. 636)

(14) *adhimokkho ti saddhā*, na yevāpanakādhimokkho ti adhippāyo. sā c’ ettha na kammaphalaṃ, ratanattayaṃ vā saddahanavasena pavattā, atha kho kilesakālussiyāpagamena sampayuttānaṃ ativiya pasannabhāvahetubhūtā. (Vism-mhṭ(Be) II, 431)「adhimokkho ti saddhā〔とは,〕聖典に省略された adhimokkha ではない，という意図である。またこの場合，これ（saddhā ＝ adhimokkha）は業果あるいは三宝を śrad-√dhā することによって起こるものではなく，煩悩や汚れから離れることと結びついている者達の，過度に（ativiya）pra-√sad する状態の原因となっている〔saddhā である〕」

(15) 註釈文献における Ś と A について，林隆嗣先生より Moh p. 16に両語の類義性が取り上げられていることを指摘して頂いた。深く感謝申し上げる。

(16) 主な研究としては Cf.［Jayatilleke 1963: 382–400］，［Gethin 1992: 106–116］，［藤田 1992］．最近の論考としては［韓 2014］がある。

(17) … Tathāgate saddhā niviṭṭhā hoti mūlajātā patiṭṭhitā, ayaṃ vuccati bhikkhave ākāravatī saddhā dassanamūlikā daḷhā, … (M I, p. 320)

(18) 以下，用例を提示する。下線部参照。

katamo ca bhikkhave puggalo saddhāvimutto: idha bhikkhave ekacco puggalo ye te santā vimokkhā atikkamma rūpe āruppā te na kāyena phassitvā viharati, paññāya c’ assa disvā ekacce āsavā parikkhīṇā honti, Tathāgate c’ assa saddhā niviṭṭhā hoti mūlajātā patiṭṭhitā. ayaṃ vuccati bhikkhave puggalo saddhāvimutto. (M I, p. 478)

また比丘等よ，信解脱者とはどれか？　比丘等よ，今ここに一部の人は，物を超越して鎮まっている非物質的な諸の解脱，それらに身体（集合体）によって接触して時を過ごしてはいない。しかし，洞察力（慧）によって見て，彼の諸の漏の一部が完全に尽くされたものとはなる。そして，彼の saddhā は如来に入り込んだもの（niviṭṭha），根の生じているもの（mūlajāta），固定したもの（patiṭṭhita）となる。比丘等よ，この者が信解脱者と言われる。

(19) *adhimuccatī* ti saddhādhimokkhaṃ* paṭilabhati. (Spk II, p. 346)「adhimuccati とは，saddhā という決意を得る」* Ee saddhāya vimokkhaṃ; Be Se saddhādhimokkhaṃ. Be, Se に従う。Cf. Spk II, p. 81.

(20) *adhimattan* ti adhikaṃ pamāṇaṃ balavaṃ* vā. (Mp IV, p. 127)「adhimattam とは，度を越えた，あるいは強力な」* Ee phalaṃ; Be Se balavaṃ. Be, Se に従う。

(21) 下に引用する用例の saddhāvimutta には異読があり，Se では saddhādhimutta となっている。パーリ文献ではしばしば vi-√muc と adhi-√muc の交代・接近が起こり，その中で saddhāvimutta と saddhādhimutta の接近も確認される（Sv II, p. 529: … saddhādhimutto[Be saddhāvimutto, Se saddhādhimutto] Vakkalittherasadiso hoti.）。そ

して，より後代になると，saddhāvimutta が saddhādhimutta の意であることが明示される（Vism-mḥt(Be) II pp. 466f.）。尚，漢訳経典においてヴァッカリは「信解脱者」とされる（T2.643a15–16, T25.46c22. Cf.［Anālayo 2011: 164n.45］）。vi-√muc と adhi-√muc の交代・接近については既に［櫻部 1997: 38–39］が指摘しており，同様の視点からの考察も行われている（［加藤 1982: 158–162］）。

aniccato manasikaroto saddhindriyaṃ adhimattaṃ hoti. saddhindriyassa adhimattattā saddhāvimutto* hoti. (Paṭis II, p. 53)

〔色等を〕無常であると思惟している者の信根は突出したものとなる。信根が突出することから信解脱者（saddhāvimutta）となる。

* Ee Be Ce saddhāvimutto; Se saddhādhimutto.

(22) 以下，実例を示す。その他 Cf. Cp-a p. 59.

tena kho pana samayena Rājagahe Supabbā nāma upāsikā mudhappasannā* hoti. sā evaṃdiṭṭhikā hoti: yā methunaṃ dhammaṃ deti sā aggadānaṃ detī ti. (Vin III, p. 39)

すると，知っての通り，その時王舎城でスパバーという名の女性在家信者が頭から pra-√sad する者となっていた。彼女は次のような見解の者となっていた。〔即ち,〕「性行為を与える女性，彼女は最上の布施をしている」と。

* Ee buddhappasannā; Be Ce mudhappasannā; Se muduppasannā. Be, Ce を採用し Ee を改める。

(23) パーリ聖典中のヴァッカリの伝承は，主に仏教における自殺の問題と関連付けて取り上げられてきた経緯がある（Cf.［Delhey 2009］，［Anālayo 2011］，［内田 2018］，etc.）。ただ，彼の自殺を伝える経（S）を含む，A I, 24, Sn 1146以外の伝承（S III, pp. 119ff., Th 350–354, Ap pp. 465ff）は Ś, A を使用しないか，しても saddhādhimutta 第一という記述のみであるため，本検討からはひとまず除外している。

(24) 同様の記述は Vism-mḥt(Be) I, pp. 151f., Ap-a p. 493 にも確認される。

(25) 以下その用例を示す。

indriyādhika-vibhāgena pañcavidhā. sati pi nesaṃ saccābhisambodhasāmaññe ekacce therā saddhuttarā, seyyathāpi thero Vakkali; (Th-a III, p. 208)

機能（根）を加えた分類としては五種の〔者達がいる〕。これら〔五種〕の者達には真実の解悟という共通性があるけれども，一部の長老達は saddhā（信根）を最上とする。ちょうどヴァッカリ長老のようなものである。

(26) idaṃ saccaṃ tacchaṃ tathaṃ bhūtaṃ yāthāvaṃ aviparītaṃ gahitaṃ parāmaṭṭhaṃ abhiniviṭṭhaṃ ajjhositaṃ adhimuttan ti. (Nidd I p. 76) Cf. Vism p. 662.

(27) Ee āṇañja-; Be Se āṇeñja-. Be, Se に従う。

(28) *lokāmisādhimutto* ti vaṭṭāmisa-kāmāmisa-lokāmisa-bhūtesu pañcasu kāmaguṇesu adhimutto, tanninno taggaruko tappabbhāro. (Ps IV, p. 52)「lokāmisādhimutto とは輪廻に

関する世俗的利益・欲に関する世俗的利益・世間に関する世俗的利益となっている五種欲に対して adhi-√muc（傾倒）している，それ（五種欲）へと下り，それを重んじている，それに傾斜している者」

参考文献

『大正新修大蔵経』（＝ T）大蔵出版
『南伝大蔵経』大蔵出版

内田みどり 2019「仏教における自殺の意味」『インド哲学仏教学研究』25, pp. 45–56.
加藤純章 1982「阿羅漢への道―説一切有部の解脱―」『仏教思想 8 解脱』pp. 149–192.
後藤敏文 2007「*śraddhā́-*, *crēdō* の語義と語形について」『論集』35, pp. 578–561.
櫻部健 1997『増補版 佛教語の研究』文栄堂書店.
浪花宣明訳 2016『増支部経典 第一巻 原始仏典Ⅲ』春秋社.
林隆嗣 2014「解説：バウッダコーシャ・プロジェクトへの提言」『仏教文化研究論集』17, pp. 53–57.
韓尚希 2014「預流における信と慧」『パーリ学仏教文化学』28, pp. 21–45.
藤田宏達 1992「原始仏教における信」『仏教思想11 信』平楽寺書店, pp. 91–142.
古川洋平 2018「パーリ経典中の śrad-√dhā の意味について ― Norman 説に注目して―」『印度學佛教學研究』66–2, pp. 917–913.
水野弘元 1964『パーリ佛教を中心とした佛教の心識論』山喜房佛書林.
村上真完 1993「「信を発こせ」再考」『佛教研究』22, pp. 115–150.
村上真完・及川真介 1989『仏のことば註㈣ ―パラマッタ・ジョーティカー ―』春秋社.
村上真完・及川真介 2014『仏弟子達のことば註㈡ ―パラマッタ・ディーパニ―』春秋社.
Anālayo. 2011. “Vakkali’s Suicide in the Chinese Āgamas.”, *Buddhist Studies Review*. 28, 2: 155–170.
Bhikku Bodhi. 2012. *The Numerical Discourses of the Buddha, A Translation of the Aṅguttara Nikāya*. Boston: Wisdom Publications.
Delhey, M. 2009. “Vakkali: New Iriterpretat of His Suicide.”『国際仏教学大学院大学研究紀要』13, pp. 67–108.
Gethin, R. 1992. *The Buddhist Path to Awakening: A Study of Bodhi-Pakkhiyā Dhammā*. Leiden: E. J. Brill.

Jayatilleke, K. N. 1963. *Early Buddhist Theory of Knowledge*. London: George Allen and Unwin.

Malalasekera, G. 1960. *Dictionary of Pali Proper Names*. London: Pali Text Society.

Woodword, F. L. 1932. *The Book of the Gradual Sayings*. vol. I, London: Pali Text Society.